# 読みの困難を抱えた児童への読書活動での活用⑥
## ～学校図書館との連携で広がる読書環境

島根県安来市立荒島小学校
井上　賞子

### 研究目的

「読みの困難を抱えている児童を対象に、音声の補助がある読書環境を整えていくことで、本の世界を楽しむ体験につなげていく」ことを研究目的に据えました。

### 活用実態

**昨年度までの取り組み概要**

・わいわい文庫の図書から、子どもたちが「自分の読みたい本」を選びやすくすることで、読書の楽しみを味わうことができるようにする。
・選んだ本へのアクセスをスムーズにすることで、日常の中で読書活動が保障されるようにする。

昨年度、一昨年度は、上記２点を目指して、書影の印刷されたポスターの閲覧をしやすくしたり、データとのナンバリングによる管理運用のしやすさを目指したりといった読書環境を整える取り組みを行ってきました。
(「わいわい文庫活用術⑧、⑨」参照)

**今年度の実践**

一人１台の端末と校内Wi-Fi環境が整ったタイミングで、わいわい文庫が国会図書館に収蔵され、ウェブからの貸し出しが可能になったとの朗報が届きました。データを個人の端末に貸し出すことがウェブ上でできれば、これまでの問題点が解消されるのではないかと考えました。

**〈 わいわい文庫活用時の問題点 〉**

・ドライブのない端末で見るためには、あらかじめデータを端末に入れてお

くことが必要になります。

・書影ポスターで読みたいものを決めても、そのデータをたくさんのデータから探し出してインストールするのにいくつもの行程が必要で、なかなか日常化することが困難でした。

そこで今年度は、「国会図書館から学校図書館を通じてわいわい文庫を対象児童個人の端末に貸し出す」ことで、読みの困難を抱えた子どもたちが「日常的に読書を楽しめる」環境の構築に取り組みました。

〈 **事前準備** 〉

①学校図書館が、視覚障害者等用データ送信サービスにおける送信承認館になるための申請を行います。

・承認申請書

・設置根拠を明記した文書

・図書館の活動状況がわかる文書

https://www.ndl.go.jp/jp/library/supportvisual/supportvisual-10_02.html

②利用者登録証が届くので、その情報で国会図書館サーチにログインします。

https://iss.ndl.go.jp/

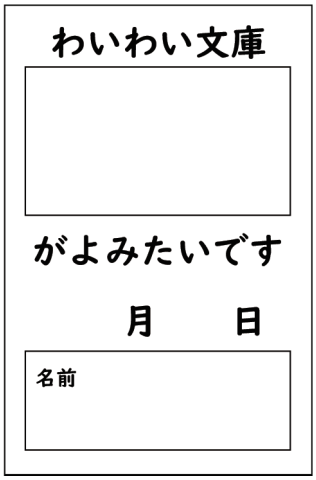
③ChattyBooksオンラインサービスにユーザー登録をしておきます。

④子どもたちのデータ通信端末（本校ではChromebook）に、ChattyBooksのアプリをストアからインストールします。

ChattyBooksのアイコン

⑤③でユーザー登録した情報で、アプリにログインしておきます。（この際、ログイン情報をGoogleに記憶させておくと、次回からIDやパスワードの入力なしにログインできます。）

〈 **貸し出し** 〉




①子どもたちは書影ポスターから借りたい本を選び、「よみたいですカード」に記入して図書館に行き、司書さんに渡します。

②学校図書館から国会図書館サーチにアクセスし、希望の書籍のデータをダウンロードします。

③ChattyBooks オンラインのサイトからアップロードします。

④リアルの書籍のバーコードを読み取り、通常と同じ貸し出し手続きをとります（校内に同じ書籍がない場合は、市内の他の図書館から借りて処理を行います）。

⑤子どもたちの端末からChattyBooksアプリを開き、「本棚」のところに出ているリスト(アップロードした本のリスト)から自分が貸し出し希望したものを選びダウンロードします。(アップロードしたデータは24時間で消えるが、ダウンロードしておくことで端末に保存されるので、それぞれの子どものペースに合わせて読むことが可能です。)

⑥子どもたちは、自分の端末で再生して読みます。

〈 返却 〉

①「よみましたカード」に記入して司書さんに渡します。

②貸し出し時同様にリアル書籍のバーコードを読み取り、通常と同じ「返却」手続きをとります。

文章で読むととても煩瑣に感じられますが、子どもたちの側からすると

①読みたい本を選んでカードに書いて図書館に持っていく

②次の日の朝には、自分の端末を開くだけで、わいわい文庫のデータが届いている

③読み終えたらカードに書いて図書館に持っていく

このような、いたってシンプルな動きのみで、支援学級の低学年の子どもたちも、すぐに１人でできるようになりました。

学校図書館の側は、最初の申請や登録には手間がかかりますが、それさえしておけば、データの貸し出し自体は短時間で作業できます。ただし、対象児童の貸出記録を現状の学校図書館の

システムの中に蓄積していくためのリアルの書籍の準備に、現状では時間がかかっています。本校は学校図書館に配置された司書さんがそうした役割を担ってくださっています。

〈 **成果** 〉

**知的障害特別支援学級Ａ児の姿から**

・今年度に入って文字が読めるようになってきましたが、拾い読みの状態であり、文章を１人で読むことはまだ困難です。

・今回の貸し出しシステム導入までは、自分から図書館に行くことはありませんでした。図書館の学習で本を借りに行って絵本や図鑑を選んで借りてきても、ロッカーに入れたまま開くことなく返却日に持っていくことが続いていました。

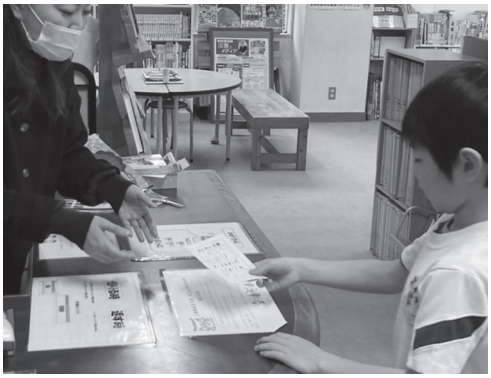
・CD-ROMをパソコンに入れてのわいわい文庫の視聴は大好きですが、端末が限られ、数人で一緒に視聴していたため、どの本を先に読むかで友だちとトラブルになることもありました。

・「自分の読みたい本を図書館にリクエストして自分の端末で自分のペースで読める」環境ができてからは、毎日１冊以上読み続けています。

・自分の端末で読んでいる時に友達が寄ってくると「面白いよ。一緒に読む？」と誘う姿も見られました。

・「よみました」の紙を図書館に持っていくのを楽しみにしており、司書さんに渡す時に内容の話をしたりもするようになっています。

**学校図書館司書さんのコメントから**



・いままでは滅多に図書館に来てくれなかった子が毎日のように顔を出してくれるようになってうれしいです。

・借りた本も、いままでとは違ってしっかり読んでくれたのが反応からわかりました。

・返却時にリアルな本のバーコードを操作していると、「あっさっきこれ読んだよ！」と手を伸ばしてきて、ページをめくる姿も見られ、興味が出てきているのかなと感じています。

〈 **課題** 〉

・ChattyBooksオンラインは、アップロードしたデータが24時間で消えるため、活用を始めた当初はダウンロードのタイミングが遅くなって消えてしまうことがありました。

・司書さんが作業できる時間は日によって異なるので、「アップロード、終わっていますか」と何度も聞きにいかなくてはいけなくなり、スムーズに読書が始められないこともありました。

・そこで、「よみたいですカード」を出したら翌日の朝に端末を開けてダウンロードしておくという手順をルーティン化しました。

・金曜日は翌日にダウンロードできないため、「よみたいですカード」はお休みにし、木曜日に多めに本を借りておく表示を行いました。

・最初は「よみたいですカード」のみでの運用を考えていましたが、アプリを開いた際に友だちがリクエストしたものも見えるため、自分のリクエストしたものでない本も読みたくなる子が複数でてきました。そこで「よみましたカード」を追加することで、読んだ本を正確に記録できるようにしました。

**取り組みを振り返って**

「オンラインでの貸し出し」「自分の端末で自分のペースで読める」が可能になったことで、

①読みたいと思ったものをスムーズに貸し出してもらえる

②（提供する側が子どもたちの端末へのインストール管理までしなくてよくなったため）学校図書館を利用することができる

という、読みに困難がない子であれば当たり前に保障されていた環境を、やっと整えることができました。わいわい文庫を読んだ場合でも、図書館で借りた他の本と同様に記録に反映できるようになったことも、「もっと読みたい」というモチベーションにつながってます。

運用が広がれば、当然新しい課題は出てくるでしょう。しかし、ハード面・ソフト面ともに大きく状況が好転したことを実感しています。

## 来年度に向けて

毎年、「この取り組みをもっと広げていく」ことを目標に掲げながら、「選ぶ」から「手元で読む」までの行程が

なかなか簡略化できない中で、自分がフォローできる目の前の数人への導入止まりになっていました。「図書館との連携」も、貸し出しの記録の共有までがせいぜいで、今年度のように「貸し出し」そのものを図書館でできる体制は作れなかったのです。

しかし、長年乗り越えることがむずかしかったハード面・ソフト面の大きな課題が、ようやく解消された今であれば、通常学級にいるたくさんの読みに困難を抱えた子どもたちにも、読書を楽しめる環境を届けることが可能です。

まずは支援学級在籍の５人を対象に始めた今回の取り組みを校内で広げていきます。加えて、同じ端末が同じ条件で整備されている市内の小学校に、本校での取り組みを共有していきたと考えています。

こうした取り組みが「当たり前」になっていくことは、対象の児童の権利保障という面でもきわめて重要です。

いままで、読むことの困難を抱えた子どもたちは、紙の本しか用意されていない学校図書館の中で読書を楽しむことができずにいました。しかし、多くの学校図書館でそうした現実は意識されてこなかったのではないでしょうか。

今回の取り組みが、どの子にとっても読書を楽しめる環境づくりにつながるとともに、そうした子どもたちの「学ぶための権利」が、他の場面においても守られているのかを考えるきっかけになってほしいと願っています。